

近江八幡とかわらミュージアム

著者	市川 訓敏
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	67
ページ	2-3
発行年	2013-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023860

近江八幡とかわらミュージアム

市川訓敏

はじめに

近江商人のふるさととして知られ、豊かな自然に囲まれた滋賀県近江八幡市。その名前の由来ともなった日牟禮八幡宮周辺は、国の「重要伝統的建造物群保存地区」の選定を受けており、その一角に近江八幡市立かわらミュージアムが、周囲に溶け込むように建てられている。もともこの地には、寺本仁兵衛氏の「瓦工房」があり、その跡地を近江八幡市が購入、後世に八幡瓦の魅力を伝え遺そうとして、その基本計画を全国に公募し、建築家の出江寛氏の構想が選ばれることになった。

かわらミュージアム

「かわらミュージアム」は、八幡堀と寺本家などの旧村に挟まれた敷地を利用、八幡堀の対岸には、瓦屋根と漆喰壁の蔵や町屋が連なって美しい佇まいを残しており、しかも、国の「重要伝統的建造物群保存地区」であるという制約を見事に克服し、周囲の景観と調和していて、気をつけないと、そこにミュージアムがあることも気づかないほどである（ミュージアムを示す標識も目立たぬように配置されている）。

ミュージアムは、全国にも珍しい瓦専門の展示館であるが、敷地に一步入った所から、ミュージアムは始まっており、表玄関へのアプローチの道は、古瓦などを綿密な計算のもとに敷き詰めた規律のある「楷書」の道であり、出江寛氏は、世阿弥の言うところの「閑華風の道」と名づけられた。そして、北へ抜ける自由奔放な「草書」の道と交わる中庭の「鯉の広場」を行書の心に見立てられた。歩くと足に心地よい。

そうした敷地内に、10棟からなる瓦づくしの建物が建てられ、漆喰でかためられた白壁と、24,000枚の昔ながらに黒く焼きあげられた屋根瓦（一枚一枚に色むらがつけられている）とのコントラストのなかで、広場のしだれ桜や百日紅、もみじなど四季折々の草木が彩りをそえるように設計されている。再び、出江寛氏の言葉



閑華風の道



中庭から見たエントランスホール



八幡堀から見たかわらミュージアム

を借りると、「瓦が歳月を重ねて深みを増し、漆喰に陰影のかかる頃、その白と黒の境界は溶けて、水墨画のトーンに落ち着いていくだろう」ことが期待されている。誰しも、そうした草木の咲き乱れる季節に再び来訪したい気にさせてくれる。

八幡瓦が、この地の地場産業になったのは、近江八幡市総合政策部文化観光課の佐竹章吾氏

(前館長)によると、近江八幡周辺には神社仏閣や近江商人の屋敷・土蔵などが多く、需要が高かったこと、また、重い瓦の運搬などに八幡堀や水郷などを利用できる水運の便があったこと、そしてなによりも、良質のかつ質の異なる粘土を豊富に採取できたことで、江戸中期に京都伏見からこの地に移り住んだ瓦職人たちがそのまま定着したということである。

今日では、機械化が進んだことで、かつての瓦工房は姿を消したが、館内に展示されている良質の屋根瓦、技術力の高さを示す彩色をほどこした瓦人形、芸術作品と言える鬼瓦など、往時の瓦製造を偲ぶに十分なものがある。

ミュージアムの一部は、かわら以外のさまざまな展示に利用され、来訪当時は、「自然といきものに魅せられて～美しい細密画・杉野由佳の世界～」を開催中であった。またコンサートやワークショップ、子どもたちのものづくり体験や地域学習、職員研修などにも活用される社会貢献に資する施設であることも、地域に溶け込んだ「かわらミュージアム」の別の一面として印象深かった。今回の来訪で、便宜をはかっていただき、かつさまざまなご教示をいただいた佐竹章吾氏、事務長の小森健行氏に、この場を借りてお礼申しあげたい。

ハイド記念館

先の出江寛氏も言及されているが、ここ近江八幡は、キリスト教徒であり建築家であったウィリアム・メレル・ヴォーリズが終生住みつけた場所であり、ヴォーリズ建築が町のあちこちに点在している。近江八幡に来たからには、ヴォーリズ建築の一端にでも触れたいと思い、ヴォーリズ建築の第一号である旧近江八幡YMCA会館（現、近江兄弟社アンドリュース記念館）、旧八幡郵便局舎などを回るとともに、近江兄弟社学園のハイド記念館を訪れることができ、館長の永芳和子氏から親しくお話を聞いたのは幸運だった。

ハイド記念館は、一柳満喜子（一柳末徳子爵の三女）が大正11年に開いた清友園から発展した幼稚園の建物であり、建築費を寄附したメンソレータム社の創業者ハイド家を称えてハイド記念館と呼ばれている。今日の近江兄弟社学園の原点であり、満喜子夫人の教育事業と、それ

をサポートしたメレル・ヴォーリズのかかわり方は、敬服の外はない。

建物は、ぬくもりのある木造の外観に加えて、内部は部屋を広くとり、高い天井と大きな窓が特徴で、子どもたちの目線で窓の外の景色を楽しめる設計になっていて、簡素な中にも、さまざまな工夫が施されている。ヴォーリズや満喜子夫人、幼稚園関係者らが、あれやこれやといろいろなアイデアを出し合いながら建物をつくっていた様子が想像されて楽しい。いつまでも建物に居続けたいと思うのはヴォーリズ建築の特徴なのか、同志社のアーモスト館（新島襄の母校アーモスト大学との友好関係から建てられた学生寮）や関西学院の時計台など、神戸女学院の建物群、神田駿河台の「山の上ホテル」や京都四条大橋西詰にある東華菜館など、人びとに愛され、今日の日本建築に大きな影響を残した洋風建築としては、ヴォーリズ建築は特筆すべきものであることを、あらためて思った。

ハイド記念館では、生徒たちが吹奏楽の練習に余念がない様子だったが、永芳館長から校舎を案内していただき、またヴォーリズ、満喜子夫妻についてもお話が聞けた。

お話をうかがいながら、ドイツの社会学者マックス・ウェーバーが描いた、巨富を擁しながら自分のために一物をも持たず、ただよき「天職」の遂行というエートスに突き動かされて生きた初期の資本家たちの姿が思い起こされた。「資本主義の精神」とは、このようなものだったのかと思いながら、校舎を後にした。機会を与えていただいた、近江兄弟社学園及び永芳館長にあらためて感謝申し上げたい。



ハイド記念館